

那珂川町の文化財Ⅹ

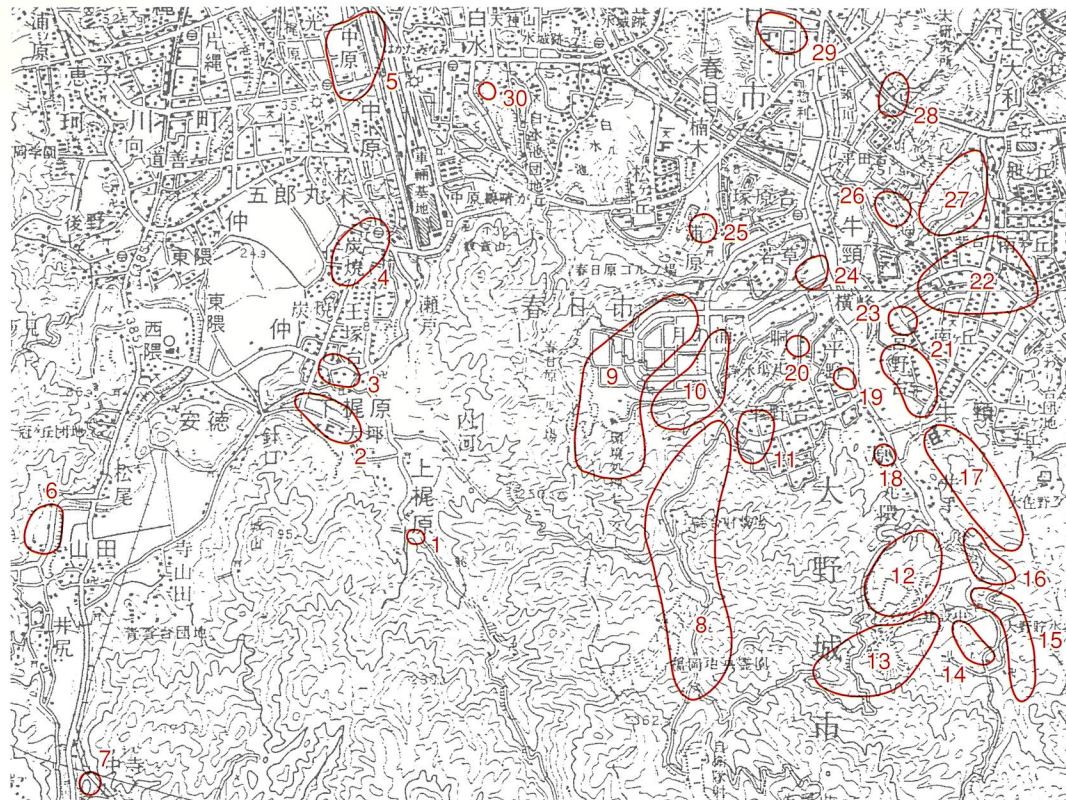
地別当遺跡群の発掘調査

1998

那珂川町教育委員会

はじめに

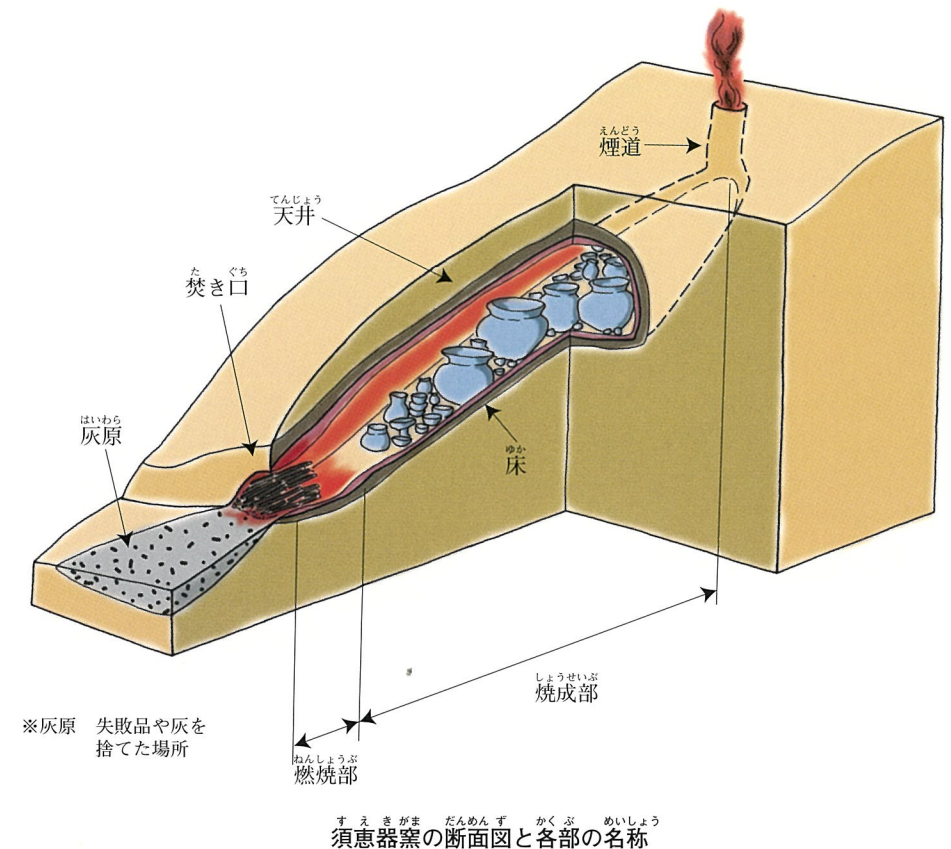
那珂川町の豊かな大地には、今もたくさんの遺跡がだれにも知られずひっそりと眠り続けています。今回調査した地別当遺跡群もその一つでした。発掘したところ、遺跡などないような山の斜面で、意外な発見がありました。町で初めて“窯—かま—”の跡が見つかったのです。ここで、その貴重な成果をみなさんにお知らせすることにしましょう。



1	地別当遺跡群	2	平蔵遺跡群	3	下梶原前遺跡群	4	カクチガ浦遺跡群	5	中原・ヒナタ遺跡群
6	次郎丸遺跡群	7	猫城跡	8	石坂窯跡群	9	後田窯跡群	10	小田浦窯跡群
11	大谷窯跡群	12	井手窯跡群	13	足洗川窯跡群	14	笹原窯跡群	15	長者ヶ原窯跡群
16	道ノ下窯跡群	17	ハセムシ窯跡群	18	原窯跡群	19	城ノ山窯跡群	20	同ノ元窯跡群
21	中通窯跡群	22	平田窯跡群	23	東浦窯跡群	24	畑ヶ坂窯跡群	25	浦ノ原窯跡群
26	華無尾窯跡群	27	野添窯跡群	28	春日平田窯跡群	29	惣利窯跡群	30	ウト口窯跡群

遺跡と窯跡の分布図 (1/50,000)

土器と窯のはなし



須恵器窯の断面図と各部の名称

今からおよそ1万年前に日本で土器が発明されました。古代の人々は、その野焼きでつくる素朴な土器を長く使いましたが、古墳時代のなかば（5世紀）に、朝鮮半島から窯で土器を焼く技術が伝わると、こぞってその新技術を取り入れるようになりました。なぜなら、この土器がかたくてじょうぶなうえ、一度に大量に焼けるからです。私たちは、この新しい土器を須恵器と呼んでいます。

ところで、この須恵器窯は、木がおいしげった低い丘の中腹や、谷間の斜面によくつくられています。傾斜があったほうがつくりやすいことと、燃料になる木材が手近にあるからです。須恵器窯の構造は、焚き口と、それにつづいて薪を燃やす燃焼部、さらに土器を置いて焼く焼成部があり、それから奥壁、煙道部へとつづいています。時代とともに、窯の大きさや形は少しずつ変化していきますが、構造はほとんど変わりません。

須恵器は古墳時代から奈良時代、平安時代の前期にかけて盛んにつくられ、その後は、各地で中世窯業が発達するとともに衰えていくことになります。

じ べっとう い せき ぐん
地別当遺跡群



◀ 1号窯跡
長さ2.5m、最大幅は1.05mです。天井は崩れてなくなっています。



▲ 1号窯の灰原
まっ黒な灰の層の中からは、須恵器の坏や壺などが出土しました。

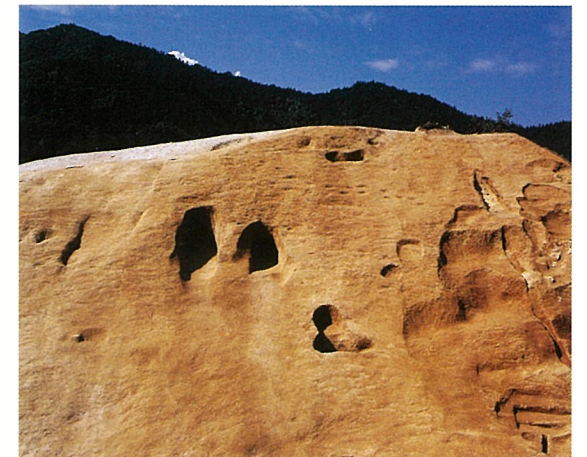


▲ 灰原で見つかった須恵器

今回は、2基の窯跡を調査しました。見つかったのは、急な斜面を昇りつめた丘の上です。窯をつくった人々は、きっと風向きなどを考えて高い場所を選んだのでしょう。窯は、2基とも天井部が崩れてなくなりましたが、もともとはトンネルのように地下をくり抜いてつくられていました。それでは、この窯はいったい、いつ頃つくられたのでしょうか？つくられた年代は、そこで出土する土器が教えてくれます。この窯の内部や灰原からは、奈良時代の特徴をもつ須恵器が出土しており、窯がつく



◀ 東から見た遺跡の全景



▲ 2号土壙・3号土壙
向かって左が3号、右が2号土壙。2号土壙は、天井部がこわれるなどして、途中でつくるのをあきらめた窯の跡かもしれません。



▲ 2号窯跡
全長は、約2.6m、最大幅は0.8m。東西を向いてつくられています。

られた年代は、8世紀の前半から中頃にかけてではないかと考えられます。

そしてこのほかに、窯に関連してめずらしい発見がありました。窯跡の近くで見つかった土壙群^{どこうぐん}です。この中の1基は、内部が空洞で、大きさや形が窯跡ととてもよく似ています。天井部が崩れるなどして、途中でつくるのをあきらめたものなのかもしれません。



▲ 1号窯の灰原から出土した土器
右奥の鉢の高さへは16.2cmです。



▲ 2号窯で見つかった土製の置台
窯の床には置台がはずれた跡が残ります。

那珂川町に残る奈良時代の遺跡

那珂川町では、旧石器時代から近世にかけてのさまざまな遺跡が発見されています。とくに奈良時代の遺跡は多く、遺構、遺物ともに貴重な発見がありました。ここで、そのいくつかを紹介してみましょう。



へいぞう いせきぐん
平蔵遺跡群

住居や墓の跡などと共に、鉄の工房跡が見つかりました。工房跡と昔のごみ捨て場からは、フイゴの羽口や鉄クズなど、めずらしい製鉄関連の遺物が出土しました。



しもかじわらまえ いせきぐん
下梶原前遺跡群

見つかった住居跡のうち2軒から、焼けた粘土や鉄クズが出土し、鉄の工房跡ではなかったかと思われます。また、勾玉が出土した住居跡は、集落の長の家であったと考えられます。

周辺地域で見つかった窯の跡

牛頸窯跡群 M-1地区
51・52窯灰原(大野城市)▶



春日平田北遺跡 1次東区
I-4号窯(春日市)▼



はじめにある分布図を見てもわかるように、那珂川町の東側では大規模な窯跡群が見つかっていきます。春日市から大野城市、そして太宰府市にかけてまたがるこの窯跡群は牛頸古窯跡群と呼ばれ、西日本最大の規模を誇ります。東西約4km、南北約4.6kmの範囲に、6世紀中頃から8世紀にかけての窯跡が数百基も存在するといわれています。また、ここで焼かれた須恵器は、太宰府のほか各地へ配られたと考えられています。

おわりに

丘陵の一部分を調査しただけでは、この上梶原の丘陵一帯にどんな遺跡が眠っているのかは判断できません。けれど今回、本町ではじめて、奈良時代の須恵器の窯跡が発見されたことは大きな成果であったといえるでしょう。これらの窯は、東に広がる牛頸古窯跡群から延びてきた一群なのかもしれません。しかしそうとするには、牛頸古窯跡群から離れすぎているということなど、いくつかの疑問も残ります。もしかすると、牛頸古窯跡群とは異なる目的があって、この地に窯がつくられていたのかもしれません。その疑問を解くためにも、今後の発掘調査が期待されることです。本町の古代史はまだまだ多くのなぞに包まれています。今回の調査の成果は、そのなぞを解く一つのきっかけとなることでしょう。

那珂川町の文化財Ⅹ
—地別当遺跡群の発掘調査—
1998年

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈64-1
印刷：アオヤギ株式会社

写真：地別当遺跡群の調査風景

